

# 複合辞の「ことだ」についての一試論

高橋 雄 一\*

## はじめに

本稿を含む一連の研究では、複合辞の「ことだ」とその周辺の形式について、筆者が高橋（2010）で複合辞の「ものだ」について示した連体修飾構造に注目する立場から、新たな見方を提示することを目指している。

本稿は上記の研究の最初の段階であり、先行研究をもとに、複合辞の「ことだ」の諸用法を、「こと」を含む文末表現との関連も考慮に入れながら把握し、さらに筆者の立場からの捉え方を示す。本稿の考察でも筆者のデータを使用するが、全体的な分析は十分ではないので、次の段階としてデータの包括的な把握とそれを踏まえた考察を予定している。

## 1. 複合辞の「ことだ」文をどのように捉えるか

### 1.1 複合辞の「ことだ」の2種

この研究で注目する文末の連体形式の複合辞の例として、野田（1995）が冒頭で示している例を引用する。（以下、用例中では、基本的に複合辞の部分に下線を引く）

---

\*専修大学文学部准教授

- 1) a. 学生は勉強するものだ。  
 b. 合格したらければ、勉強することだ。  
 c. こらっ、勉強するんだ。

これらはいずれも、下線部の要素が一つに結びついて「行為の実行が望ましいということ」をあらわす当為的な用法」となっている。ここでは、こういった表現を「複合辞」として研究の対象とする。

これらのそれぞれの複合辞の用法について、野田（1995）やその他の研究の指摘をごく簡単にまとめておくと、「ものだ」は、「学生は…」のように一般化された主体について述べることにより、聞き手に対しても同様の行為を促す表現である。「ことだ」は、ある状況について聞き手や第三者がそこですべき行為を示す表現であり、「ものだ」と比べると個別的とされる。「のだ」は、聞き手を主体として、その行為を実行することが望ましいという判断が、何らかの形ですでに定まっていることを表す表現である。

上のうち、特に「ものだ」と「ことだ」については、モダリティにおける「当為表現」（寺村1984，森田・松木1989，野田1995）、「価値判断のモダリティ形式」（益岡1997，森山2000）、「評価のモダリティ」（高梨2010）とされるが、両者とも他の同様の表現・形式と比べて制限があると言われる。また、「ものだ」「ことだ」という形式について見る場合にも、モダリティの範疇に入る用法はあくまでそれぞれの用法の一部にしかすぎないということになる。

このように、上の1) b「合格したらければ、勉強することだ。」のような「ことだ」については、単に〈当為〉とするだけでは不十分ではあるが、ここでは、“〈当為〉を表す複合辞の「ことだ」と呼ぶことにする。なお、筆者は特に、複合辞の「ことだ」を含む文全体に注目する立場であるので、

“…複合辞の「ことだ」の文”とする場合もある。

従来、このような複合辞の意味・機能についての記述は多く行われてきたが、なぜ「こと」という名詞が、文末の複合辞の要素となった場合に、そのような意味・機能を持つのかということについては、十分な説明はなされていないのではないかと思う。筆者は高橋（2010）で、連体修飾構造に注目する立場から複合辞の「ものだ」を論じた。ここではその考察の延長として、〈当為〉の複合辞の「ことだ」を見てゆきたい。

名詞「こと」の連体修飾をどのように捉えるかについては、高橋（2010）で次のような例を挙げた。

2) 私が知っていることをお話します。

3) 私が海外で日本語を教えていたことをお話します。

2) は、被修飾名詞の「こと」を連体節内に入れて、「私が（その） ことを知っている」という一つの文を作ることができる。このような構造をこの研究では「関係節の構造」と呼ぶことにする。3) は異なる構造であり、連体節「私が海外で日本語を教えていた」が表しているのは、被修飾名詞「こと」の内容である。この研究では「内容節の構造」と呼ぶことにする。名詞としての「もの」は「関係節の構造」しか作れないのに対し、「こと」のように「内容」を持つ名詞は、両方の構造が可能である。

1) bの「合格したければ、勉強することだ」を上への構造の観点から見ると、後者の内容節の構造に該当するということになるだろう。もちろん、「ことだ」が複合辞である場合、文全体は名詞述語文としての構造を持たないので、あくまで内容節の構造に近いというだけである。

本稿では、〈当為〉を表す複合辞の「ことだ」の文について、「内容節の構造」を反映していると考えることにより、その特徴についてより適切に説明ができると考える。

本稿では考察の中心としないが、複合辞の「ことだ」にはもう一つの用

法がある。「詠嘆」(森田・松木1989)、「〈感慨〉用法」(井島2012)、「話し手のおどろき・感動・皮肉・感慨などを表す」(グループ・ジャマシイ(1998))などと言われる用法である。ここでは、高橋(2010)で見た「ものだ」の〈感心・あきれ〉の用法に暫定的にあてはめて、「〈感心・あきれ〉の「ことだ」と呼ぶ。

- 4) 家族みんな健康で、けっこうなことだ。
- 5) いつまでもお若くて、うらやましいことです。(以上グループ・ジャマシイ(1998))
- 6) 「大体、相伴役の方々が無作法ですぞ。儒者としてこれほど有名な私を知らずして、よくも朝廷に仕えていられることだ。おろかもめが」(新源氏(井島2012による))
- 7) 永禄七年になった。

この間、尾張の信長は美濃奪取の夢がわすれられず、(中略)永禄四年以来、連年、連戦連敗をつづけて勝ったためしもないのに侵攻をくりかえしている。

(倦きもせずよくやることだ)

と越前の地で光秀は思い、信長の体質に身の毛もよだつほどの異常な執念ぶかさを発見し、考えこまざるをえなかった。(国盗り)

上の4) 5) は、「ことだ」に前接する部分が、形容詞やそれに類する表現によって、話し手の感情や評価を表している。〈感心・あきれ〉の「ものだ」にも「大したものだ」のような用法があるが、用例を置き換えていくと違和感が感じられるので、完全に同じ表現ではないようである。

「ものだ」の場合、そのような感情や評価を誘発した出来事を動詞述語文で述べ、それに「ものだ」を後接させて〈感心・あきれ〉を表す用法があるが、「ことだ」の場合はそのような用法(上の6) 7))は比較的限られることが指摘されている。(森田・松木(1989:143-146), 井島(2012:122)) 上の用例からも、このような「ことだ」が現代の話し言葉としては

使われにくいことが明らかであろう。

先に見た筆者の連体修飾の把握を、この2つ目の用法についてもあてはめてみると、「けっこうなことだ」のような用法については、「こと」の内容は述べて、それについての感情や評価を述べていると考えられるため、関係節の構造に類するということになる。(この場合は「節」ではないが、連体修飾のタイプとして同様と考える)

これに対し、「よくも朝廷に仕えていられることだ」のような用法は、内容そのものを述べていると考えられるため、内容節の構造ということになる。

ここまで見た2つの用法が、複合辞の「ことだ」の用法と考えられる。これ以外の用法がある可能性について指摘する研究もあるが、筆者は今のところ、上で見た2つのようにはっきりしたグループはないと考えている。

ただし、姫野(2000)が「「こと」の助動詞的用法」の一つとして挙げている「昔はよく～したことだ(回想)」という文型について、ここで簡単に触れておきたい。同様の「～シタものだ」という形式である「モノダの「回想」」には、全てではないが「過去の習慣などの繰り返し」といった特徴が認められるのに対し、仮に「昔はよくこの公園で遊んだことだ。」という例文を作ってみても、事態の生起のし方に関する類似した特徴は認められない。筆者自身はこの〈回想〉の「ことだ」については、もし該当する実例があるとするならば〈感慨〉の一種なのではないかと考えている。高橋(他)(2005:233)が「② 感動的に回想・評価する「シタ コトダ」「シタ コトカ」としている用法は、おそらくこれに当たるのではないかと思う。

8) ああ、その時 僕がどんなにドキドキしたことか。

9) それをまあ、選りにもよって! —と私は、その時、芸術家の感興を弁えぬ村人たちから、最も不名誉な形容詞を浴びせられたこ

とであった。(2例とも高橋(他)2005(表記を本稿に合わせた))  
動詞が述語の場合は、「シタコトカ」が代表的とされているようであるが、2  
例目についても「シタコトデアッタ」の形で感動表現になるものがあるとい  
う指摘をしている。

ここでさらに注目したいのは「ことか」と「ことだ」の表現としての近  
さである。「ものか」の場合は、「泣くものか」のように〈反語〉であり、  
「ものだ」の諸用法とははっきりと区別される。しかし、上のような「シ  
タコトダ」「シタコトカ」のグループ化を見ると、「ものか」についても、  
〈感心・あきれ〉の「ものだ」と関連づけて考えるべきではないかと考え  
られる。次に示す「ものだ」文の諸タイプでは、高橋(2010)を修正して、  
〈反語〉の「ものか」を、〈感心・あきれ〉の「ものだ」と同じグループに  
入れる。

このような見方をとると、単に〈過去〉や〈回想〉を表す「シタコト  
ダ」「シタコトダッタ」という表現ははないということになる。筆者は現  
時点ではそのように考えている。これはおそらく複合辞の要素としての「も  
の」と「こと」の相違点の一つであろう。そして、「こと」にはこの種の  
「ことだ」の用法がない代わりに、過去の〈経験〉を表す「シタコトガア  
ル」があるのではないだろうか。

「シタコトガアル」のような「こと」を含む分析的形式は、他にも「こ  
とにする」「ことになる」「ことができる」等、いくつかある。このように、  
「ことだ」の用法が少ないことと、「こと」を含む分析的表現が比較的バラ  
エティに富んでいることは、関連づけて考えるべきであろう。

## 1.2 複合辞の「ものだ」文の捉え方

ここで、「ことだ」と対比させるために、高橋(2010)で示した複合辞  
の「ものだ」文の捉え方を、本稿での修正も含めて述べておく。

複合辞の「ものだ」は、従来の研究で明らかのように、「ことだ」に比

べて種類が多い。そこには、名詞述語文の構造からの類推ができ、〈一般性〉という特徴で括ることのできるものとそうでないものがある。高橋(2010)では、そのような2つのグループを分け、〈一般性〉が当てはまらないグループについては、名詞述語文でも「内容節的な構造を持つ「ものだ」文」と関連させて考えるべきであるという提案をした。この違いは「ものだ」の助動詞的な性質にも関連していると考えられ、“事態の生起の仕方”を対象として、「ものだ」がそれに〈一般性〉を付け加えていると考えられるグループと、“事態のあり方”を対象として、「ものだ」がそれに〈(事態生起の) 確定性〉を付け加えていると考えられるグループがあるというように考えた。これはそれぞれ、「ものだ」が述語で表わされる意味に関わるのか、いわゆる命題としての事態全体に関わるのかという違いとも考えられる。

下に、高橋(2010)をもとに、名詞述語文の「ものだ」文からの類推ができるか否かで分けた2つのグループを示す。先に見た〈反語〉については修正をして、類推ができない方に入れている。

### ① 名詞述語文の「ものだ」文からの類推ができるグループ

〈本質・傾向〉〈一般化〉と〈当為〉

- 10) 学生は勉強するものだ。
- 11) 悪いことをした時は、すぐにあやまるものだ。

〈回想〉〈繰り返し〉

- 12) 子供の頃はよくこの公園で遊んだものだ。

〈願望〉

- 13) いつか私もそこへ行ってみたいものだ。
- 14) 警察は、誠意ある対応を見せてもらいたいものだ。

## ② 名詞述語文の「ものだ」文からの類推ができないグループ

〈回想〉（一回の出来事）

15) その話を聞いた時は、ひどく驚いたものだ。

〈感心・あきれ〉

16) 勉強もしないで試験に合格するなんて、よくそんなことができるものだ。17) 勉強もしないで試験に合格するなんて、大したものだ。

〈反語〉

18) 泣くもんか。

筆者としては、この分け方を複合辞の「ことだ」の2種にもあてはめることができるのではないかと考えている。すなわち、〈当為〉の「ことだ」文は、“事態の生起のし方”を対象として、「ことだ」が述語を中心とした意味に関わっていると考えられ、一方、〈感慨〉の「ことだ」文は、“事態のあり方”を対象として、「ことだ」が事態全体に関わっていると考えられる。

上の「ものだ」と対比させると、複合辞の「ことだ」の用法は限られていて、「～た」に後接する〈回想〉、「～たい」等に後接する〈願望〉がない。また、「～スルことか」も「どんなに」などの疑問詞を伴うところに特徴があり、〈反語〉とは言えない。

## 1.3 名詞述語文の「ことだ」文について

ここで、複合辞になっていない、名詞述語文の「ことだ」文を見ておこう。この場合、「こと」はあくまで名詞（形式名詞）であり、連体修飾部で述べられる「内容」と共に、先行する別の内容の言い換えをしている。

(先行する内容に波線の下線を引く)

19) 愛することは信じることだ（草の花）

- 20) 「どうだ。君の中で何かが壊れたろう。俺は友だちが壊れやすいものを抱いて生きているのを見るに耐えない。俺の親切は、ひたすらそれを壊すことだ」(金閣寺)
- 21) 「世の中で悪いものは、色気だね」  
母は独り言のように言った。  
「イロケ?」  
「よく思われようとすることよ」(太郎)

19) 20) のように、一文の中で「XハYダ」という名詞述語文の主述の関係が見られる例が典型的と思われるが、それだけではなく、21) のように一文を超えて同様の関係が認められる例もある。ただしこの場合も、「よく思われようとすること」の前に、本来は「イロケというのは」があり、それが繰り返しを避けるために省略されていると考えられる。いずれにせよ、名詞述語文の「ことだ」文の場合は、文法的に主述の関係があることが必須の条件になると言うことができるであろう。

試みに、19) を、文脈なしで述部のみ提示する用例にしてみよう。

19') 信じることだ。

(あるいは、「信じることだよ。」「信じることです。」「信じることですよ。」等)

おそらく、この場合は、“話し手が、聞き手の状況を考慮しながら、聞き手に対してアドバイスをする”という解釈が優先すると思われる。すなわち、〈当為〉を表す複合辞の「ことだ」として解釈されやすいということである。

この〈当為〉の用法の場合も、発話の背景に何らかの状況があるということは感じられるが、その状況についての言及は、先に見た名詞述語文の例における省略が主語についてのものであるのに比べると、例えば条件表

現の前件であるので、より背景的な述べ方として捉えられるのではないかと考えられる。試みに、19')に前件となるような例文を付け加えた作例を示す。

19') あの人を愛しているなら、信じることだ。

#### 1.4 複合辞の「ことだ」文の前件

次に、〈当為〉を表す複合辞の「ことだ」文の前件について考えてみよう。下に、文型辞典の例文と、小説からの実例を示す。(前件に当たる部分に波線の下線を引く)

- 22) かぜをはやくなおしたいんだったら、あたたかくしてゆっくり寝ることだ。(グループジャマシイ (1998: 116))
- 23) 「コンスタンティノーブルへ行ったら、よく見てくることだね。  
(コンスタン)
- 24) 「信夫。守らなくてもいい約束なら、はじめからしないことだな。  
(塩狩峠)

このような前件については、備前 (1989) が、前件には「目的を表わす条件節」「仮定条件を表わす条件節」の二種が多いという指摘をしている。下に引用する実例は、後者に当たるであろう。

- 25) しかし、気をつけなければならないことがあります。せめて家ぐらいはもらおうと頑張っている、夫が勝手に家を売ってしまうことがあるのです。そんな気配があれば、弁護士に頼んで仮差し押え証を書いてもらうとか、仮処分申請を裁判所に出すなどの処置をしておくことです。(備前1989: 6 (円より子『離婚を考えたら読む本』))

筆者のデータは、現在のところ、小説とその解説、また新聞からのものであるので、前件がはっきりと現れている例は少ない。備前 (1989) が挙げ

ている例は、方法や手順を述べる性格の強いテキストからである。こういったテキストでは、前件となる条件を明示する例が見られるようである。今後、筆者も用例を採るテキストのタイプを広げてゆき、前件がある場合の特徴も見てゆきたい。

筆者の現在のデータでは、下のように、前件に当たる内容は文脈の中で読み取ることになる例が多い。文脈が分かるように例文の前を長めに引用する。

26) 「おととい……」

「そうさ、君はこれでもう丸二日眠っていたんだ」と老人は言った。「もう永久に目を覚まさんのかと思ったくらいだよ。森にでも行っておったんじゃないかね？」

「すみません」と僕は言った。

老人はストーヴの上であたためていた鍋を下におろし、それを皿にとった。そして僕の体を抱えるようにして起し、背もたれにもたせかけた。背もたれは骨の軋むような音をたてた。

「まず食べることだ」と老人は言った。「考えるのも謝まるのもそのあとだ。食欲はあるかね？」(世界の終りと)

27) 三菱自動車は、今回の教訓として、品質諮問委員会を発足させた。元最高裁判事など外部の人材も加え、広く情報を集めて、トップに進言するという。

冷静な助言は、危機の際にとりわけ重要だ。その意味で取締役や監査役に社外の人を招き入れることは役立つ。経営を監視するという観点から、労働組合の役割も大事だ。

消費者の安全にかかわる情報などは、トップが率先して公開すべきことは、いうまでもない。「握りつぶす」「隠す」「遅らせる」は事態を悪くするだけである。

売上高やシェアばかり気にする経営姿勢も見なおす必要がある。目先の収益につながらずとも、危機管理に直結する広報や品質管理といった部門に適材を充てることだ。(朝日)

以上のように見てくると、テキストのタイプにもよるが、〈当為〉を表す複合辞の「ことだ」文の前件は、名詞述語文の「ことだ」文に比べて、明示される必要性は弱いという傾向があると言えるのではないかと思う。

### 1.5 〈当為〉を表す複合辞の「ことだ」文の特徴のまとめ

ここまで見てきたように、名詞述語文の「ことだ」文を、「内容A」を「内容B」で言い換える」という文型として捉えると、〈当為〉を表す複合辞の「ことだ」文は、後件に当たる部分で、ある行為を、必要なこと、適切なこととして呈示することを中心とする表現ということになりそうである。前件に当たる部分では、その行為の必要性、適切性を生じさせる「ある状況」を提示することになるが、それは必ずしも一文の中で明示される必要はないようである。

さらに、「ことだ」に前接する動詞について従来指摘されている特徴として、形態が「スル／シナイ」といった形に限られ、意志的な行為を表す(寺村(1982))。特に「スル」の場合は、動詞が意志動詞に限られる(姫野(2000), 吉川(編)(2003))ということがある。

筆者の立場からこの特徴についての捉え方を述べておくと、〈一般化〉〈当為〉を表す「ものだ」が、“事態の生起のし方”に対して〈一般性〉という意味を付け加え、それが〈当為〉の表現にもなるというように考える場合、この〈当為〉の「ことだ」も、意志的な行為による“事態の生起のし方”に、〈必要性〉という意味を付け加え、それが〈当為〉の表現にもなっているというように考えられる。

高梨 (2010) は、「評価のモダリティ」を表す諸形式の一つとして、ここで見ている「ことだ」を扱っている。そこではこの種の「ことだ」を、「一番 | いい／重要な／必要な | のは～することだ」という表現としてまとめられる形式名詞「こと」+「だ」の文との連続性や、副詞「要是」「とにかく」「何より」などとの共起をもとに、「最重要行為提示の「ことだ」と呼ぶとしている。また、この種の「ことだ」には「ことではない」という否定形がないことについては、「[Pすることではない]は情報価値が極端に低いから」としている。

こういった指摘は、筆者の立場からも納得がゆくものである。ただし、「最重要行為提示」という概念の、「最重要」や「一番」という部分は、筆者はあまり重要ではないように感じられる。下に示す同様の名詞述語文の実例にも、確かにそのような表現は見られるが、必ずしも複数の候補から第一のものを選ぶという意味が含まれているわけではないと思う。〈当為〉を表す複合辞「ことだ」の場合にも、単にその状況に合ったある一つの行為の必要性を述べるということなのではないかと思われる。

28) —おまえにも勉強させてやりたいと思ったのだけれど、うまくいかなかった、残念だった。しかしな、愛川、学問をやることだけが大事なことじゃない。人間、何をやってもいいんだ。一番大事なことは、まっすぐに生きることだ。いいか、よく働くんぞ。それから、からだを大切にしてくな。」(路傍)

29) 「神戸登山会の発展策として、まず考えられることは若手の優秀なメンバーの獲得であり、それらのメンバーをできるだけ早くリーダーに仕上げて、実績をつくることだ」(孤高)

30) しかし今は仕方がないと、彼は思っていた。必要なことは、なるべく早く婚約を正式なものにすることだ。要するに江藤自身が彼女の良人としてふさわしい社会的条件を身につけることだった。(青春の)

以上のように見てきたことを筆者の観点からまとめておく。

〈当為〉を表す複合辞「ことだ」は、意志的な行為を表わす動詞の非過去形に接続し、その行為が“ある状況において必要である”といった意味を付け加える。「ものだ」文は、「もの」を中心とした関係節の構造がもとにあることから、一般性や確定性といった意味を持つが、「ことだ」文は「こと」の内容としての構造がもとにあるので、述べられた内容の通りの個別性を持ち、非過去形が表現する未確定性を持つ。

前件との対応については、名詞述語文の場合と比べると、前件と後件の繋がりは弱いと考えられる。これは、次に見る「ことはない」という否定形式が、上記とは別の文型がもとにあると考えられることとも関連している。

## 2. 否定形式「ことはない」をどのように捉えるか

### 2.1 「ことはない」という否定形式

〈当為〉を表す複合辞の「～スルことだ」の下線部「だ」を否定形式にする場合、「～スルことはない」となり、本来形態的に対立するはずの「～スルことではない」とはならない。このことは多くの先行研究で指摘されてきた。比較的古い研究では、田中（1964）が、「ことだ」と「ものだ」について、それぞれ意味が近く否定形式も同様の表現に置き換えることによる説明をしている。

- 31) あっさり、あきらめることだ。
- 32) あっさり、あきらめるものだ。
- 33) あっさり、あきらめることはない。（「あきらめる必要はない」におきかえられる）
- 34) あっさり、あきらめるものではない。（「あきらめるべきではない」

におきかえられる)

すなわち、「ことだ」の否定形式「ことはない」は「必要はない」と同様の表現と考えられ、「ものだ」の否定形式「ものではない」は「べきではない」と同様の表現と考えられるということであろう。ただし、ここではそれらの意味・機能についての言及はない。

このように、「ことだ」と「ことはない」の肯否の対立は、「ものだ—ものではない」に比べて乖離があると言える。これは、どのような動詞に付くかの違いとしても現れる。先に見たように、「ことだ」に前接して〈当為〉を表すのは意志動詞に限られるのに対し、「ことはない」は、例えば高橋(他)(2005:121)に示されているように、「気にすることはない」「恥ずかしがることはない」のように、聞き手の心的傾向を述べる場合には無意志動詞が使われる。もっとも、これも先に見た「ことだ」の前を否定形にする「～シナイことだ」についても、「気にしないことだ」「恥ずかしがらないことだ」のように同様の表現ができる。

また、「～シナイことだ」と「～スルことはない」がどのような意味を持つ表現であるかという観点から見ても、前者がその行為をしないよう忠告するのに対し、後者はその行為が不必要であることを述べるというように、異なる表現として見ることができる。これについては、姫野(2000:29)が、他の当為表現や命令表現との連続性を示した表を示している。

### 35) 姫野(2000)の対応表

	〈価値判断表現〉	→	→	〈命令表現〉
[勧告・義務等]	することだ		しなければならない	するんだ
[忠告・禁止等]	しないことだ		してはいけない	するんじゃない
[不必要等]	することはない		しなくてもいい	

この表に従って述べると、「～スルことだ」と「～シナイことだ」の対応は、〈命令表現〉への連続体を成す〈価値判断表現〉の範囲で、肯定—否定の対応を成しているといえられる。一方、「～スルことだ」と「～スルことはない」の対応は、〈命令表現〉の範囲からはみ出す〈価値判断〉の表現の範囲で、例えば「義務」の有無について表現する形式の組み合わせとして見ることはできるのではないかと思う。

試みに、複合辞の「ものだ」をこの表にあてはめてみると、否定形式は、「～シナイものだ」も「～スルものではない」も、[忠告・禁止等]にあてはまり、[不必要等]はあてはまるものがないということになるのではないかと思う。ただし、「～シナイものだ」と「～スルものではない」が全く同じ表現というわけではない。

以上のように、「ことだ」と「ものだ」の肯否の形式を比べると、「ことだ—ことはない」の不整合が目立つ。しかし、同様の形式の複合辞で、否定形式が「N ハナイ」になるものは他にもある。例えば、「わけだ」「はずだ」は、「N デハナイ」「N ハナイ」の両方の否定形式がある。ここでは論じることはできないが、それぞれの否定形式の記述を見ると、意味・機能に違いがあることが分かる。

下に、ここで見た4つの複合辞の形式の肯否の組み合わせを整理した表を示す。該当しない形式には、網掛けのマス内に取り消し線が引いてある。「N ハ／ガ アル」については、「ハ」と「ガ」の違いも考慮に入れなければならないだろうが、ここではそれは問わないことにする。

なお、特に「ことだ」の表については、例えば吉川（編）（2003）の内容を順に見てゆくと明らかなように、〈蓋然性〉を表わす「スルことがある」(例：東京でも雪が降ることがある)、〈経験〉の「シタことがある」(例：京都へ行ったことがある)、〈不生起〉を表わす「スルことはない」(例：この服は防水加工してありますので、濡れることはありません)などの、

形式上関連のある他の用法と併せて把握する必要がある。

36) 「ことだ」「ものだ」「わけだ」「はずだ」についての肯定・否定形式の対応表

	肯定	否定
Nダ	ことだ	ことではない
Nハ/ガ アル	ことはある	ことはない

	肯定	否定
Nダ	ものだ	ものではない
Nハ/ガ アル	ものはある	ものはない

	肯定	否定
Nダ	わけだ	わけではない
Nハ/ガ アル	わけがある	わけがない

	肯定	否定
Nダ	はずだ	はずではない
Nハ/ガ アル	はずがある	はずがない

## 2.2 「ことはない」文としての特徴

「ことだ—ことはない」がなぜこのような組み合わせになるのかについては、おそらく、連体修飾構造について見る筆者の観点から独自の指摘ができるのではないと思われる。ここでは十分な説明をすることはできないが、今後の研究につながるとと思われる点をいくつか述べておく。

まず、ここで見ている複合辞「ことはない」は、先に見た「ことだ」と同様に、内容節の構造をとっていると言えることを確認しておく。例えば、先に見た「あっさり、あきらめることはない」という例文において、「こと」は、「あきらめる」対象であるを見なすことはできず、「あっさり、あきらめる」を内容としてとると見なす方が適切であろう。

「ことはない」の文も内容節の構造がもとにあると考えると、「ことだ」と同様に「こと」の内容が表現の中心となっているということになる。そのため、述べられた内容の通りの個別性を持ち、非過去形が表現する未確定性を持つといった特徴は共通しているだろう。ただし、先に見たように、

無意志動詞が使われる場合もあるので、「ことだ」と完全に同じとは言えないであろう。

「ことだ」の場合、名詞述語文の場合は「XハYダ」という文型であるという観点から、複合辞の文についても考えた。その上で、複合辞の文については、特に後件に当たる部分が表現の中心になっているという捉え方を示した。

「ことはない」の場合は、少し特殊な点があるようである。まず、「Nガアル／ナイ」という表現について名詞述語文を考えると、場所の二格の名詞を伴った「XニYハナイ」という文型が考えられる。これはいわば存在文の否定形式であり、XにおけるYのあり・なしという、Yの存在について述べる表現と言えるだろう。ただし、「ことはない」については、場所の二格の名詞はとりにくいと考えた方がよいようである。下記のように場所のデ格の名詞をとるか、主体を表わす二格が主題化されたかたちになるであろう。このような特徴は、名詞「こと」が具体物を表すことができないことによると言える。

- 37) a \*今日は、ここにすることはない。  
 b 今日は、ここですることはない。  
 c 私には、することはない。

複合辞の「ことはない」の場合は、主体にその行為をする必要がないことを述べる表現であるから、上のcに近いということになるだろう。

複合辞の「ことはない」文の前件については、実例を十分に見ていないので確実ではないが、理由を表わす接続表現や、確定条件を表わす条件節が目立つようである。

- 38) 痴ほうは病気のだから、何ら恥じることはない。が、物忘れによる生活の混乱、はいかいなど、介護には大変な苦勞が伴う。(朝

日)

39) 学生として私は何をやるべきなのか。学校側が四四年度のプログラムを何にも示していない以上、今授業料を払いこむことはない。

(二十歳の)

40) よく考えてみろ。お前はまだ二十六になったばかりで、これからが本当の人生ではないか。いい人さえみつければ、やはり結婚して新しい家庭を持つことが一番正しい道だと思う。お前が相手を気に入らないのなら、何も気にすることはない。あっさり断わってしまえばいいではないか。(錦繡)

これは、「ことはない」が、必要性の無さを述べる表現であり、必要性の有無は確定した事態に対して述べられやすいためではないかと考えられる。

41) a ?もし試験が簡単なら、一生懸命勉強することはない

b 試験は簡単なのだから、一生懸命勉強することはない

このような傾向からは、複合辞の「ことはない」文の前件が、先に見た複合辞の「ことだ」文の前件に比べて、明示される必要性が強いことが推測される。次のように、「ことはない」文の前件に当たる部分を、後に続けている用例も目立つ。

42) 「あは、あは、何も行くことはない。台湾から飛行機が迎えに来るはずだ。オートジャイロで、ほら、ここへ着陸するはずだ」(野火)

43) 「花子、なにも心配することはない。天候もいいし、身体の調子も絶好だ。おそらく予定通りに、四日には家へ帰れるだろう」(孤高)

### 2.3 内容節の構造から見た複合辞の「ことだ」と「ことはない」

最後に、ここまで見てきたことをもとに、〈当為〉を表わす複合辞の「こ

とだ」文と、その否定形式としての複合辞「ことはない」の文について、連体修飾構造の観点から考えられることを述べておく。

〈当為〉を表わす複合辞の「ことだ」文と「ことはない」文において、いわゆる命題と「こと」との関係は、被修飾名詞とその内容との関係、つまり内容節の構造に類するものと考えられる。複合辞であるので、名詞述語文の場合のように、先行する主語などの意味を、「こと」によってまとめられた内容によって言い換えるというような関係があるわけではないが、ある状況において、「こと」の内容として示される行為の必要の有無を述べる関係というのは、内容節の構造に類すると言える。

〈本質・傾向〉〈一般化〉と〈当為〉を表わす複合辞の「ものだ」については、関係節の構造を持つ名詞述語文からの類推によってその特徴を捉えることができる。これと対比させる形で、〈当為〉を表わす複合辞の「ことだ」については、従来、〈個別性〉が特徴として指摘されてきたが、これをさらに発展させる形で、本稿の内容をもとに「ことだ」の特徴を述べると次のようになる。すなわち、〈当為〉を表わす複合辞の「ことだ」は、意志動詞が表わす“事態の生起のし方”（あるいは“させ方”）について、〈事態を生起させる必要性〉という意味を付け加えている。一方、その否定形式の「ことはない」は、〈事態を生起させる不必要性〉を付け加えている。いずれもまだ不十分な定義と思われるが、本稿では仮にこのようにまとめておく。

内容節の構造という観点から見れば、「ことだ—ことはない」が肯否の対立として形式上不整合な組み合わせであることについても、内容を提示することが主であるためと考えられる。これは「ものだ—ものではない」が、「もの」を中心とした表現であることと対照的である。

現在のところは以上のような捉え方であるが、「ことだ」は、肯定が「こと が／は ある」であれば整合性があるわけであるから、なぜそうでないのかということについての説明が必要であろう。さらに、2種の否定形式

を持つ「わけだ」「はずだ」等をどのように捉えるかについても視野に入れて考察を進める必要があるであろう。

## まとめ

本稿では、〈当為〉の「ことだ」と、それに対応する否定形式「ことではない」を見てきた。ここで示した捉え方を一つの段階としてさらに研究を進めてゆきたい。

本稿で論じた内容を改めてまとめておく。

複合辞として認められる「ことだ」には、主なものとして、〈当為〉の「ことだ」と〈感心・あきれ〉の「ことだ」がある。筆者のこれまでの研究で、〈一般化〉〈当為〉を表わす複合辞の「ものだ」文が、関係節の構造からの延長として〈一般性〉の意味を持つという捉え方ができることを見た。複合辞の「ことだ」についてもこのような捉え方をすると、内容節の構造をもととして、その特徴を説明することができる。

本稿では特に〈当為〉を表す複合辞の「ことだ」を見た。「ことだ」文の前件には、後件で述べられる必要性を生じさせる状況が条件節などの形で述べられている。しかし、名詞述語文の主述の関係とは異なり、前件が明示される必要性は弱いようである。また、肯否の対立は、「ことだ—ことではない」という不整合な組み合わせになっている。これらの現象は、複合辞の「ことだ」「ことではない」が、ある状況で必要とされる、または不必要な行為を内容節的なかたちで提示する表現であるからとすることができる。

以上のように本稿で捉えた現象は、「こと」という名詞が、いわゆる形式名詞の中でも特に実質の意味が弱く、内容をとる機能に特化しているという点が現れているとすることができるであろう。

## 実例について

本研究のデータとした実例を採取したコーパスは、『新潮文庫の100冊 CD-ROM』による小説の本文と解説の文章と、『朝日新聞』ウェブページの2000年8月26日～11月30日の内容による新聞の文章である。

実例の数は、『新潮文庫の100冊 CD-ROM』は「こと」54525例、このうち「ことだ」865例、「ことはない」734例である。『朝日新聞』は、「こと」5644例、このうち「ことだ」140例、「ことはない」83例である。

本文中のカッコ内に示した出典名のもとは次の通り。

(朝日)『朝日新聞』, (金閣寺)『金閣寺』三島由紀夫, (錦繡)『錦繡』宮本輝, (草の花)『草の花』福永武彦, (国盗り)『国盗り物語』司馬遼太郎, (孤高)『孤高の人』新田次郎, (コンスタン)『コンスタンティノープルの陥落』塩野七生, (塩狩峠)『塩狩峠』三浦綾子, (新源氏)『新源氏物語』田辺聖子, (青春の)『青春の蹉跎』石川達三, (世界の終りと)『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹, (太郎)『太郎物語』曾野綾子, (二十歳の)『二十歳の原点』高野悦子, (野火)『野火』大岡昇平, (路傍)『路傍の石』山本有三

## 参考文献

- 安達太郎 1998 「認識的意味とコト・モノの介在」『世界の日本語教育 日本語教育論集』8 国際交流基金日本語国際センター
- 井島正博 2012 「モノダ・コトダ・ワケダ文の構造と機能」『日本語学論集』第八号 東京大学大学院 人文科学系研究科 国語学研究室
- グループ・ジャマシイ (編著) 1998 『教師と学習者のための 日本語文型辞典』くろしお出版
- 高梨信乃 2010 『評価のモダリティ』くろしお出版
- 高橋太郎 (他) 2005/1997 『日本語の文法』ひつじ書房
- 高橋雄一 2010 「複合辞の「ものだ」についての一試論 ——内容節的な構造を手掛か

- りに」『専修国文』87号 専修大学
- 田中章夫 1964 「～するわけだ・～することだ」『日本文法講座3 ゆれている文法』明治書院
- 坪根由香里 1996 「ことだに関する一考察 ——そのモダリティ性をさぐる」『ICU日本語教育研究センター紀要』5 国際基督教大学
- 寺村秀夫 1981 「「モノ」と「コト」」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店  
 (『寺村秀夫論文集I』1992 くろしお出版 所収)
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(編) 2003 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 野田春美 1995 「モノダとコトダとノダ ——名詞性の助動詞の当為的な用法」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版
- 林四郎 1960 『基本文型の研究』明治図書出版
- 備前徹 1989 「「～ことだ」の名詞述語文に関する一考察」『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学』No.39 滋賀大学
- 姫野昌子 2000 「形式名詞「こと」の複合辞的用法 ——助詞的用法と助動詞的用法をめぐって」『東京外国語大学 留学生日本語センター論集』26 東京外国語大学 留学生日本語センター
- 益岡隆志 1997 「2 文法の基礎概念1 ——構造的・形態的概念」益岡隆志(他)『言語の科学5 文法』岩波書店
- 森田良行・松木正恵 1989 『日本語表現文型』アルク
- 森山卓郎 2000 「1 基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3』岩波書店
- 吉川武時(編) 2003 『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書房